

第3回教師のための「難民問題ワークショップ」

～ 難民問題をどう教えるか ～

報告書

1. 企画の目的

教師やNGO（非政府組織）の職員、青少年活動のリーダーなどが、このワークショップに参加することによって、開発教育の参加型学習を学び、難民問題をより体験的に、より深く子どもたちに教えられようになること。それによって、より多くの子どもたちに難民問題を学ぶ機会を提供すること。

2. 実施概要

実施日： 2005年3月25日（金）午前10時～午後5時40分

会場： 国連大学ビル2階 レセプションホール

対象： 小・中・高・大学の教員、難民問題を教える機会のあるNGOの職員や
青少年活動のリーダーなど

講師： 丸山まり子氏、奈良県安堵小学校教師、開発教育研究会メンバー。

2000年、開発教育研究会とUNHCRが協力して古今書院より出版した難民問題を扱う教材集「新しい開発教育のすすめ方 II—難民」（開発教育研究会編）の著者の一人。各地で難民問題などについてのワークショップを開きファシリテーターを務めている。

主催： UNHCR駐日地域事務所

共催： 特定非営利活動法人 開発教育協会（DEAR）

特定非営利活動法人 日本国連HCR協会

後援： 外務省

渋谷区教育委員会

3. 参加者 計43人

教師	中学校	3人
	高校	3人
	大学	4人
学生	（開発教育を学んでいる人やゼミでNGO活動をしている人）	11人
NGO関係者	難民援助団体	5人
	地域の交流協会	3人
	UNHCRの支援団体（ガールスカウトなど）	5人
	その他	1人
開発教育協会会員		3人
日本国連HCR協会	助っ人会員	5人

その他 来賓 外務省 野呂元良 人道支援室長、笹原直記 事務官 2人

運営スタッフ 開発教育協会（DEAR） 2人

日本国連HCR協会（職員・ボランティア） 4人

UNHCR（職員・ボランティア） 12人

4. ワークショップの内容

10:05 開会挨拶

UNHCR ピルコ・コウルラ地域代表
外務省 国際社会協力部 野呂 元良 人道支援室長
開発教育協会 佐渡友 哲 理事
日本国連 HCR 協会 赤野間 征盛 代表理事

10:20 講師 丸山まり子氏紹介

10:25 アイス・ブレイキングとグループ作り、グループの中での自己紹介

10:40 セッション1 難民とは

- ・ フォトランゲージ (旧ユーゴスラビアで撮影された写真から)
- ・ UNHCR ビデオ「難民もみんな同じ地球人」 導入部から“難民とは”の部分の視聴。
- ・ 難民地図の作成－難民の数や存在している地域を参加者が予想し、50 枚のシールを世界地図に貼る
- ・ 難民問題の基礎について説明 (UNHCR 広報官 箱崎律香)
- ・ 振り返りシートの記入 (Q. 難民のことで、他にどんなことを知りたいでしょうか?)

11:35 セッション2 逃げる

- ・ シミュレーション
紛争が起こり、船に乗って逃げ、国境をこえるための審査を受ける、など難民が逃げる時の疑似体験をする。①グループ内でそれぞれ役割 (家族構成) と逃げる時「かばん」を詰めるモノを決める。②船に乗るため、船が混雑したなど、荷物を減らさねばならない時に何を選ぶか決める。③国境を越えるために、入国シートに記入し入国係官と交渉する。
- ・ 食糧 (おにぎり) と水の配給
- ・ 振り返りシートの記入
- ・ スーダン難民の子ども「ヤコブの話」を聞く (「難民の子どもたち」UNHCR 発行より)

12:35 昼食

13:30 グループ分け

セッション3 難民キャンプの暮らし

フォトランゲージ

- ・ グループごとに異なる写真を見ながらわかったことについて話し合う (この写真は、どこで、何歳くらいの子どものが、何をしているところでしょうか? これまでどんな経験をし、何を願っているでしょうか?)。援助によって生きていけるが、生きがいや達成感の少ない難民キャンプの生活を考える。
- ・ キャンプの暮らしと難民の子どもたちや女性について説明 (UNHCR 広報室 野中聖子)

13:45 セッション4 生きる希望

- ・ ビデオ「難民が描いたエルメスのスカーフ」(テレビ朝日制作)の上映－フランスの NGO の支援によって、ウガンダで生活するスーダン難民の少年たちが絵を学び、その作品のうちの1枚がエルメスのスカーフの絵柄に採用されたという実話。
- ・ 難民の若者の前向きな姿 エチオピアで暮らすスーダン難民女性のカディジャについて (UNHCR 広報官 箱崎律香)

14:30 休憩

14:45 セッション5 どこに向かっているのでしょうか。日本? どんなことに困るのでしょうか。

- ・ ベトナム「ボートピープル」写真を使い、インドシナ難民が日本に約1万人定住したことを説明。「外国に難民として暮らすには、どのような苦労があるか? どのような苦難に直面するのか?」についてグループごとに話し合う。

15:30 セッション6 日本国内の難民状況 難民支援協会 筒井志保さん担当

- ・ 3つの質問をする (日本にはどのくらいの数の庇護希望者が来ているか? 誰がどのように難民認定の審査をするか? 移民と難民の違いは何か?)
- ・ ビデオの視聴 日本の難民認定制度について、難民認定された人や申請中の人のインタビュー番

組（NHK 制作）を通して知る。

- ・ワークシート「私の気持ち」（開発教育協会 作成）から、このビデオを見て感じた気持ちを選び、なぜその気持ちを選んだのかという理由を全体で共有。
- ・日本の難民受け入れについて説明。参加者の質問にも答える。
「政府だけの問題ではなく、市民として、社会として一緒に取り組むべき課題である」というメッセージの発信

16:15 セッション7 振り返り

- ・今日、どんなことを感じ、考えましたか？ 各自で、グループで、全体で共有。
- ・私たちにできること（振り返りシートの記入、グループで共有）
- ・UNHCR のアンケートの記入（35 名から回収、別紙参照）
- ・日本国連 HCR 協会の活動から 助っ人会員の活動などによる地域での取り組み、援助資金の必要性など（奥平章子）

17:30 閉会の挨拶（UNHCR 箱崎律香）

17:40 終了

5. まとめ

■今回の参加者の申し込み動機をみると、①難民問題について、日本国内の状況について知識を深めること、②（この課題に興味を持っていない）子どもたちや市民の関心を引き付け、③どのようにこの課題を特に子どもたちに伝えればよいのか、というのが主であった。

一方、参加者のアンケート（詳細は別紙参照）では、ワークショップ全体について、回答者全員（43 人中、35 人が回答）が「大変良かった」もしくは「良かった」と答えている。主な理由として、①参加型で学ぶことができたこと、②全国からのさまざまな参加者と意見交換ができたこと、③内容が実践的であったことがあげられている。

また、第 1 回、第 2 回と同様に、講師の丸山まり子氏の教室での実践に基づいた説明によって、①どのようにしたら子どもたちの関心をこの課題に引きつけられるか、②子どもたちに、いかに伝えればよいのかを知ることができた、と参加者に好評であった。ワークショップの中で丸山氏はこう語っている。

- ・子どもに話をするとき、単純に『まだ子どもだから』と理解力を決めつけてかからずに話すほうがよい。大人よりも子どものほうがずっと想像力が豊かで『ちょっと難しすぎるんじゃないか』というような内容でも、案外、大人のように先入観を持っていない分、スーツと入ってゆける場合がある。
- ・さらに『（子どもに）こういうふうな理解をさせたい』というようにもっていくのではなく、あくまでも子どもの関心にいかに寄り添って授業を進めるかがポイント。
- ・伝えたいことを伝えるのではなく、子ども（相手）がどのように受け止めているかを見るのも大切。

■アンケートの中で「よくわからなかったこと」「もっと知りたいこと」としては、日本国内の難民問題に関係する内容が多くあげられていた。セッション6「日本国内の難民状況」に参加して、参加者が難民認定制度や受け入れ態勢についてなど様々な疑問を感じ、さらに調べてみようという動機付けられたことが意味深い。また、「日本では難民は犯罪者のように思われているようだ」と難民支援協会筒井志保 事務局長が現状を語る中で、参加者が日本の社会のあり方に眼を向けるきっかけになったようである。

■参加者全員から、このワークショップを「生かすことができる」という回答を得た。具体的には地域での活動、学校の授業などで、今後の実践が期待される。また、今回の参加者の中には、愛知万博で今回学んだワークを実際に行う予定であるとの大学のグループ（担当教授とそ

の学生)が参加していた。

■冒頭の挨拶の中で、開発教育協会（DEAR）の理事から「このワークショップのタイトルから教師のための」という文言を取り、対象を広げてはどうかという提案があった。今回、ワークショップ開催日が、終業式と重なってしまった地域があつてか、教師の参加が例年より少なかった。これについては、参加者の見方は2つに分かれている。一つは、教師でないNGO関係者や草の根グループのメンバーなどからで、「参加している教師から教え方や子どもの反応について聞きたかった。もっと教師の参加を増やして欲しい」。あるいは元教師の方から、参加対象を教師に特化したワークショップを実施して欲しいという声があった。（ただそうすると、この意見を出した方を含めて、教師でない人は参加できず、経験や交流はできないことになるが）。一方、教師からは、教師のみが参加するものかと思っていたが、「様々な参加者がいて有意義だった」、あるいは極端な意見では、「教師が少なくて良かった。教師が多いとワークショップがパターン化してしまう」という声が出されていた。ただ今回については、日程の設定にもっと注意を払うべきであった。

写真で見るワークショップ 2005



ワークショップ受付。北は秋田県、南は鹿児島県から計 43 人が参加



「みなさまようこそいらっしやいました」オープニング・スピーチに立つ、コウルラ UNHCR 駐日地域代表



ワークショップを後援してくださった外務省より、野呂元良人道支援室長のご挨拶



「難民問題は日本と世界を見る窓」。共催団体である開発教育協会 (DEAR) より佐渡友哲理事のご挨拶



「難民とともに、難民のために私たちは活動しています」と語った日本国連 HCR 協会より赤野間征盛代表理事。



「難民キャンプに行ったことのある人は？立って移動してください」。グループを作るために参加者に話しかける講師の丸山まり子さん



「同じグループになったのはどんな人かな？」。少し緊張気味に自己紹介する参加者たち



セッション1 この写真に写っている人々は「何をしているのでしょうか？」



セッション1 難民は、世界のどこに、どのくらいの数いるのだろう？アフリカ？アフガニスタン？



セッション2 戦争が起こり、家族で逃げなければならなくなりました。かばんには何を詰めてもって行きますか？「お金？」



セッション2 ようやく国境までたどり着きました。入国カードを手渡されましたが、なんて書いてあるのかわかりません？



セッション2 「カードに、早く書いて入国したいけれど・・・」。後ろで難民の申請を待つ、3人の入国係官



昼食。参加者と話す、丸山まり子講師（左から3番目）。



セッション3 「難民キャンプの暮らし」。この写真に写っている子どもたちは、どこの国からの難民でしょう？



セッション3 他のグループの写真から読み取れたことを見て回る参加者たち



セッション6 「日本国内の難民状況」で話す筒井志保 難民支援協会事務局長。「難民問題は私たち一人ひとりが、日本社会が取り組んでいくべき課題です」



セッション7 振り返り 「子どもたちには、こちらが伝えたいことを伝えるのではなくて、子どもたち自身の関心に寄り添うように話を進めていくのがいいのです」と丸山さん